

## 科学・技術の時代におけるアメリカの理想像

青砥 吉隆

### I. はじめに

空飛ぶ円盤と宇宙人をめぐる言説、つまり空飛ぶ円盤神話についての研究には、大きく分けて二つの流れがある。一方は、その言説が生まれてきた原因と内容の変遷を当時の社会背景に求めるというアプローチであり、その代表は、カーティス・ピーブルズによる『人類はなぜUFOと遭遇するのか (Watch the Skies!: A Chronicle of the Flying Saucer Myth)』である。ピーブルズは懐疑的な見地に立って個々の空飛ぶ円盤の目撃事例を研究しており、膨大な量の一次資料から空飛ぶ円盤についての言説の変化を読み取った<sup>(1)</sup>。

もう一方の流れは、空飛ぶ円盤神話を文化的な側面から考察するもので、木原善彦による『UFOとポストモダン』がその代表に挙げられる。タイトルが示しているように、この研究は空飛ぶ円盤神話の変化の過程とその誕生の原因を、ジジェクやラカン、ハーバーマスなどのポストモダンの思想家たちによる議論を用いて説明した。木原による研究は、ピーブルズに欠けていた思想史、あるいは文化史的な視点を的確に補うものだったといえる<sup>(2)</sup>。

ところで上記の二つの研究はともに、コンタクティー (contactee) とスペース・ブラザー (space brother) を取り上げている。コンタクティーとは、空飛ぶ円盤を駆使して地球へやって来たとされる宇宙人たちから様々なことを学んだと主張した人々のことであり、1950年代アメリカの世間の注目を大いに集めた。そして、彼らが出会ったとされる宇宙人たちはスペース・ブラザーと呼ばれた。

両研究は、コンタクティーたちが出会ったとされるスペース・ブラザーの特徴をまとめている。それによれば、スペース・ブラザーたちはこの世のものとは思

えないほどに美しい人々だとされた。またスペース・ブラザーは、戦争、貧困、不幸、もしくは様々な欲望が生み出す、いわば地球的な問題から切り離された社会に暮らしているとされた。スペース・ブラザーは何千年も生き、生まれ変わりをすることさえ可能だった。彼らは合理的で科学・技術に優れた人々であり、さらに地球の科学・技術の危険性をも理解していた。また彼らは、慈愛に満ちた動機から地球を訪問していた。つまり彼らは、戦争を防ぎ、核実験をやめさせ、そして彼らが達成していたユートピアのような社会を人類が建設することを望んでいたのだという<sup>(3)</sup>。このようなピーブルズや木原によるスペース・ブラザー理解は的確であり、本研究も彼らの成果なしには考えられない。

しかしピーブルズは、スペース・ブラザーという神話が誕生し、受容された理由について明確には論じなかった。それは、木原についても同様である。木原は、空飛ぶ円盤と宇宙人をめぐる言説が誕生した理由を説明したが、スペース・ブラザーに、なぜ上記のような特徴が与えられたのかについては説明していない。

さらに、木原によるスペース・ブラザーについての言及はピーブルズからの二次的な引用によって成り立っており、研究に必須となるはずの、コンタクティーがスペース・ブラザーについて著した書籍などの一次資料を用いて、具体的な分析や検証を行うことはなかった。つまり両研究とも、スペース・ブラザーの誕生と文化的受容の理由を直接的には明らかにしておらず、スペース・ブラザーに絞った研究は十分になされたとは言えないのである。

そこでこの研究では、なぜ他でもなく1950年代のアメリカにスペース・ブラザーという奇妙なアイディアが誕生し神話として受容されたのか、という問いへの答えを明らかにしたい。この問いに答えることは、従来の研究を補いつつ統合することにもなるだろう。

この問いを解く上で重要な点は、スペース・ブラザーについての言説が特に1950年代のアメリカに集中していたということである。1960年代以降には、新しいコンタクティーは少数を除けば誕生しておらず、その登場の仕方も散発的だった。また1970年代後半以降にも、信奉の対象として受容された宇宙人がいた

ことは事実である。しかしその宇宙人たちは、主にニューエイジ・ムーヴメント（New Age Movement）と呼ばれる宗教的運動に参加していた者たちに信奉、受容されたものであり、さらに、宇宙人らの思想や彼らにとっての科学・技術のあり方などの点で1950年代のスペース・ブラザーとは一線を画している。そして、その運動の中心を担ったのはチャネラー（channel / channeler）という全く違った性質を持つ人々だったし、そこではスペース・ブラザーという呼称も用いられなくなっている<sup>(4)</sup>。

つまり、スペース・ブラザーは1950年代のアメリカに特有な神話だったのである。そのため、スペース・ブラザーの誕生と受容の理由について論じるには、1950年代のアメリカの特異性を考察しなければならない。

結論は、以下ようになる。スペース・ブラザーという神話は、彼らが高度な科学・技術を有していながらも、1950年代アメリカにおいてはかなりの確率で起こりえると思われた核による滅亡を免れているとされたために当時のアメリカに誕生し、少なからぬ人々に受容された。重要なのは、アメリカにおける1950年代とは科学の時代だったということだ。科学の時代において信奉の対象となったのは、科学・技術が生み出した核兵器の危険性を乗り越え、なおかつ科学・技術が生み出した豊かで幸福な生活を享受しているとされた宇宙人たちだったのである。

この結論を導くために、まずは空飛ぶ円盤と宇宙人についてどのようなことが言われてきており、それはどの程度受け入れられていたのかについて、当時の新聞記事や雑誌、ギャラップ調査などの統計資料を用いて論ずる。我々人類よりもはるかに優れた宇宙人たちが地球を訪れているかもしれないという言説が広まっていなければ、スペース・ブラザーというアイディアが誕生し受容されることもなかっただろう。

その後、コンタクティーたちが著した出版物を用いてスペース・ブラザーたちの特徴を分析し、なぜ彼らが受容されたのかを明らかにしていきたい。スペース・ブラザーが受容された最も重要な要因は、第一に1950年代アメリカにおける

冷戦と核兵器への不安感と、第二に科学・技術への期待感だった。これら二つの要因を探るために、当時広く読まれた雑誌『ライフ (Life)』誌や映画作品を資料として用いる。

ところで、空を移動する正体不明の飛翔体は、現在では一般に「未確認飛行物体 (Unidentified Flying Object / UFO)」と呼ばれている。ピーブルズによれば、この言葉が初めて公に用いられたのは、最初の空飛ぶ円盤の目撃からおおよそ2年を経た1949年4月30日付けの『サタデー・イブニング・ポスト (Saturday Evening Post)』においてだった<sup>(5)</sup>。

また木原によれば、1952年に「UFO」は米国空軍の正式な用語として採用され、さらに一般化していった。しかし現在とは異なり、「UFO」という言葉には宇宙人が操縦する乗り物という含意はなかった。それは元来、人為もしくは自然現象と確認されていない飛行物体のことを指していた<sup>(6)</sup>。宇宙人の乗り物を意味する言葉としては、1950年代初頭にはむしろ「空飛ぶ円盤 (flying saucer)」という用語が広く使用されていた。

そのため、1950年代に特有だったスペース・ブラザーの神話に焦点を当てる本稿では、宇宙人が操縦しているとされた飛行物体を指す際に、「空飛ぶ円盤」という言葉を用いることにする。また、地球外に存在しており、空飛ぶ円盤を操縦していると目された高度な知能を有する生命を、一般的な用法に従って「宇宙人」と呼ぶ。スペース・ブラザーは、1950年代において語られた宇宙人の別称として考えて差し支えないだろう。

なおこの研究は、扱う対象をスペース・ブラザーとそのイメージのみに絞っている。そのため、コンタクティーおよび彼らの運動に参画した人々の宗教学的、あるいは社会学的な分析は行っていない。この分析には、心理学者のレオン・フェスティンガー (Leon Festinger) による研究や、カリフォルニア大学パークレー校の、テイラー・バックナー (Taylor Buckner) による社会学的研究がある<sup>(7)</sup>。

また本稿では、空飛ぶ円盤やスペース・ブラザーについて書かれた様々な書籍を引用する。その中には、明白な詐欺や虚偽の報告、自然現象の誤認、あるいは

トリックであることが既に判明しているものが数多く含まれている。しかしここでは、スペース・ブラザーや空飛ぶ円盤が実在したかどうかについては分析を行わないし、それらにまつわる出来事の価値判断も一切行わない。むしろ信憑性に乏しいと思われる内容の書籍であっても、必要であればそれらを引用したい。

なぜなら本稿の目的はスペース・ブラザーについての言説の真偽を検証することにあるのではなく、むしろ、スペース・ブラザーという奇妙なアイデアが誕生し、少なからぬ人々から受容された原因とその過程を、1950年代のアメリカという切り口を通して理解することにあるからだ。この目的を達成するには、まず、その神話の内容をあるがままに把握しなければならない。ただし、宇宙人と空飛ぶ円盤が実在し、地球を訪れていることを立証するのに足る十分な証拠は今のところないと、筆者は考える<sup>(8)</sup>。

## Ⅱ. 文化的下地

ここでは、スペース・ブラザーという神話がなぜ誕生し受容されたのかを解き明かすために、1950年代のアメリカにおける空飛ぶ円盤と宇宙人についての言説の広まりについて明らかにする。文化的な下地がなければ、スペース・ブラザーの神話が誕生し、受容されることもなかっただろう。

### 1. 神話のはじまり

地球以外にも生命がいるというアイデアの歴史は古く、古代ギリシアから存在した<sup>(9)</sup>。しかし、そのアイデアが広く一般に広まり始めたのは、20世紀のアメリカにおいてである。これに役買ったのがSF雑誌群だった。20世紀半ばまでのSF雑誌を例示すれば、『アスタウンディング・ストーリーズ (Astounding Stories)』や『ウィアード・テールズ (Weird Tales)』、『サイエンス・ワンダー・ストーリーズ (Science Wonder Stories)』などが挙げられる。その中でも特に、1926年にヒューゴー・ガーンズバック (Hugo Gernsback) によって創刊された世界初のSF専門雑誌、『アメージング・ストーリーズ (Amazing Stories)』は、H・

G・ウェルズ（Herbert George Wells）やジュール・ヴェルヌ（Jules Verne）などの著名なSF作家を揃えていた<sup>(10)</sup>。彼らは地球外の生命についての作品を数多く残している。

その中で最も有名なものが、ウェルズによる『宇宙戦争（*The War of the Worlds*）』である。この作品は、宇宙船に乗ってやってきた火星人が地球を侵略するというものであり、火星人人の持つ圧倒的な科学・技術と、それが故の彼らの脅威が描かれていた<sup>(11)</sup>。この作品はオーソン・ウェルズ（Orson Welles）によってラジオドラマ化されており、1938年に放送された際には一部の聴者が火星人人襲来を事実と勘違いしてパニックを起こしたという<sup>(12)</sup>。

アメリカにおける、火星の文明とそこに暮らす知的な生物というアイディアは、もとを辿れば天文学者であるパーシヴァル・ローエル（Percival Lowell）に行き着く。ローエルは19世紀後半に火星人の実在を唱え、論争を引き起こしている。彼はアリゾナ州に自費でローエル天文台を建設し、火星の表面にある幾何学的な図形を観察していた。彼は、それらを火星人の作った運河だと考えた。1907年においては、ジャーナリストだけではなく、天文学者の中にも火星の運河の存在と生命の居住可能性は妥当であると認める者がいたという<sup>(13)</sup>。

しかし概観すれば、宇宙人の実在というアイディアを持つ作品は、SFという限られた読者層に向けられたジャンルのものであった。そのアイディアは一般の人々の間には浸透せず、ましてや何年にも渡って巷間に広まり続けるということも無かった。それは、ローエルによる論争についても同じであった。つまりその時点では、宇宙人の実在のアイディアは「神話」と呼べるものではなかった。その状況を一変させたのが、ケネス・アーノルド（Kenneth Arnold）による世界初の空飛ぶ円盤目撃事件だった。

1947年6月24日、個人パイロットであり実業家だったケネス・アーノルドは、アメリカ合衆国オレゴン州レイニア山の北方を飛行している際、「高度約9500フィートで北から南に向け、さらに正確に言えば、方位角約170度方向へと飛行していく、航空機のように見える奇妙な九つの連なり」を目撃した。ワシントン

州やキマに到着後、目撃から数時間のうちに、彼の見たものは米国の秘密兵器、もしくはソヴィエトの航空機であろうという仮説が、他のパイロットとの間に出来上がっていた。アーノルドは地元新聞社の東オレゴン新聞へ赴いて、「週の終わり」というコラムの担当編集者と彼の見たものについて話した。この編集者は、始めはアーノルドが悪ふざけをしているのではないかと疑ったが、彼がパイロットであり、連邦保安官代理という要職も務めている実業家だということを知ると態度を変えた。新聞の一面には「フライング・ディスク」や「フライング・プラッター」、そして最も広く用いられた「空飛ぶ円盤（フライング・ソーサー）」といった見出しが躍った<sup>(14)</sup>。

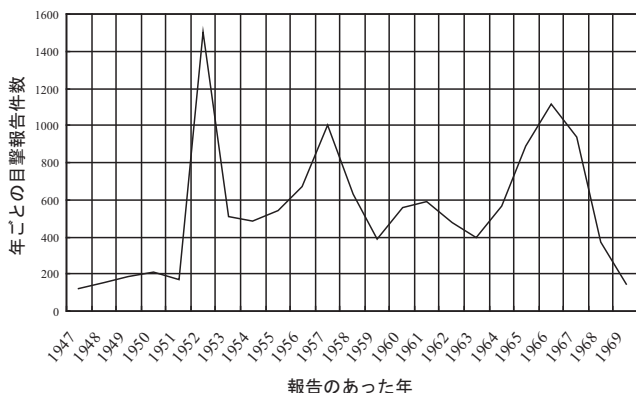
## 2. 統計

数々のデータが、スペース・ブラザーが誕生した1950年代初頭には既に、宇宙人が存在し地球を訪れているという神話が一般の人々の間に浸透していたということを示している。1947年12月30日に、「国家機密にかかわると推察される大気圏内現象のすべての報告を収集、評価し、関心を持つ行政機関に配布する」ことを目的として、米国空軍は空飛ぶ円盤を調査するための常設組織を立ち上げた。当初「プロジェクト・サイン（Project Sign）」と名づけられ、後に「プロジェクト・グラッジ（Project Grudge）」、そして最終的には「プロジェクト・ブルーブック（Project Blue Book）」と名称を変更されたこの組織は、調査の一環として1947年以降、空飛ぶ円盤の目撃報告の統計を取っている。年度毎の目撃報告件数をグラフにしたものが、図版1である<sup>(15)</sup>。

統計が取られていた1947年から1969年までの空飛ぶ円盤目撃報告の総数は、12,618件だった。ここから導き出される年間平均報告数は548.6件であり、また、最も目撃報告の多かった年は1952年だった。この年の目撃報告総数は1501件であり、これは平均すると一日につき、4.1件もの空飛ぶ円盤の目撃報告が空軍に寄せられたということを意味している<sup>(16)</sup>。なお1952年は、後述するようにスペース・ブラザーというアイデアが誕生した年である。

図版 1.

1947-1969年に空軍へ寄せられた目撃報告件数



これらの件数が、米国空軍へ報告された事例のみを計上したものであることに注目したい。この点を考慮すると、実際にはこの数倍の人数の人々が空飛ぶ円盤と思しき飛行物体を目撃していたということが予想される。そもそも政府機関である米国空軍が空飛ぶ円盤の目撃報告の統計を取るということ自体が、空飛ぶ円盤とその操縦を担うと目された宇宙人に対する人々の間での関心の高まりの表れだったと言える<sup>(17)</sup>。

また、アメリカの調査機関ギャラップ（The Gallup Organization）は、空飛ぶ円盤についての世論調査を行っている。第一回の調査が行われた1947年7月23日は、空飛ぶ円盤が初めて目撃されてからわずか一ヵ月後のことだった。質問は、「空飛ぶ円盤について読んだ、もしくは聞いたことがありますか（Have you heard or read about the “flying saucers” ?）」というものであり、3006人に対して質問が行われ、2995人が回答した。

注目すべきことに、その質問に対して93.99%もの人が「はい」と答えている。また、1950年4月28日、同年5月2日、そして1952年8月29日にも同じ質問で世論調査が行われたが、その際にもそれぞれ96.00%、90.62%、96.41%と、いず

れも9割を超える高い確率で肯定的な回答が得られた<sup>(18)</sup>。この結果は、1947年以降のアメリカ文化において、空飛ぶ円盤と宇宙人についての言説が広く一般にまで浸透し、神話となったことの証左である。

### 3. 空飛ぶ円盤の機動性能

ところで、航空宇宙史学者であり、空飛ぶ円盤と宇宙人の実在に対して懐疑的な立場を採る前掲のピーブルズは、1947年から1952年までの間に目撃された空飛ぶ円盤の性能について、以下のようにまとめている。

地球の大気内で、何百年もの間、円盤型の飛行物体が目撃されていた。空飛ぶ円盤はレーダーにも捉えられている。また、そのスピードと機動性能は、通常の航空機を遥かに凌駕しており、直角のターンなども出来る<sup>(19)</sup>。

より具体的にみるために、ケネス・アーノルドが目撃したとされる空飛ぶ円盤を例に挙げよう。アーノルドが計器盤の時計を用いて計算したところ、彼が目撃した九つの飛行物体は、時速1,700マイル（時速2,720キロ）以上で飛行しているという結果が出たという。これは当時としては驚異的な速さである<sup>(20)</sup>。スミソニアン航空宇宙博物館の学芸員であるトム・クラウチ（Tom Crouch）によれば、人類が音の速さである時速約1,200キロを超えることが出来たのは、その約四ヶ月後である1947年10月14日だった<sup>(21)</sup>。

上述の、直角に曲がるという飛行性能も注目に値する。航空機は通常、旋回する際にはゆるやかな弧を描く。直角に曲がれば急激な重力がかかり、機体と乗組員に損傷を与える恐れがあることがその理由だ。しかし、地球の航空機とは対照的に、空飛ぶ円盤は、このような技術的な壁を乗り越えたかのような動きを見せるものとされた。また、空飛ぶ円盤の実在に対して懐疑的な立場を採る研究者のピーター・ブルックスミス（Peter Brooksmith）によれば、当時報告された空飛ぶ円盤の中には、物理法則すら無視したような動きをする物さえあったという<sup>(22)</sup>。

上述のような、空飛ぶ円盤が有するとされた人智を超えた機動性能は、少なからぬ人々に以下のような憶測をさせた。つまり、人類よりも優れている存在でな

ければ、人類が作り上げた航空機を超え、さらに物理法則すら超えるような航空機を作り上げることは出来ないはずである。そのような航空機を操縦する者とは宇宙人以外にないだろう<sup>(23)</sup>。

このような想定は、1950年代のアメリカにおける、空飛ぶ円盤について書かれた様々な新聞や雑誌の中に散見される。一例を挙げれば、『ライフ』誌の1952年4月7日号は、「宇宙からの来訪者はいるのか (Have We Visitors from Space ?)」と題した、見開き3ページ分の特集を組んでいる。そこでは、当時目撃されていた飛行物体について、箇条書きで「それらの物体は、現在の科学では自然現象として説明がつけられず、むしろ高度な知性によって製造され、操縦されている人工の機械だと考えられる。地球で知られている、あるいは計画されている動力装置では、それらの機械の機動性能を説明することはできない。」<sup>(24)</sup>と結論付けられていた。

また、1947年7月6日付の『ニューヨーク・タイムズ (New York Times)』紙は、空飛ぶ円盤に関する様々な仮説のリストを掲載している。その中では、自然現象や人工の物体であるという可能性に加えて、「成層圏上空の宇宙船から発射された、他の惑星から来た訪問者の乗り物かもしれない」という仮説が同時に紹介されていた<sup>(25)</sup>。

そして、その翌日の1947年7月7日付け『ニューヨーク・タイムズ』紙には、アメリカ空軍の広報担当スタッフである、トム・ブラウン (Tom Brown) 大尉によるコメントが掲載されている。それは、空飛ぶ円盤の起源が地球以外にあると示唆するようなものであった。

我々はいまだに、それら (空飛ぶ円盤) の正体を全く把握していない。しかし、いくつかの報告が示しているように、時速1,200マイル (時速約1,920キロメートル) で飛行する誘導ミサイルを開発した国は、わが国を含めてどこにもないと信じている<sup>(26)</sup>。

このように、初めて空飛ぶ円盤が目撃された6月24日から2週間を経ないうちに、大手の新聞が熱心に扱うほどに空飛ぶ円盤がアメリカ国内で相次いで目撃されていた。しかもそこでは、空飛ぶ円盤と、その搭乗員であると目された地球外の生命との関連の可能性が早くも指摘されていた。

我々よりもはるかに優れた航空機を持ちえるのは宇宙人以外に無いだろう、という想定は、この種の記事によってさらに一般へと広まっていった。これは同時に、この想定がすでにアメリカに広まっていたということを示すものでもあろう。そして、このような想定をしたのは科学的に素人であったジャーナリストたちや、それを読んだ一般の人々だけではなかった。空飛ぶ円盤が目撃され始めた初期の段階においては、科学者や空軍高官においてさえも、空飛ぶ円盤が宇宙人の乗り物であると信じる者が数多くいた<sup>(27)</sup>。

ただ、空飛ぶ円盤の性能についての言説の広まりと、宇宙人は我々人類よりも優れた存在であるというアイディア、つまり宇宙人神話の広まりとの関係は鶏と卵の議論だと言えるかもしれない。空飛ぶ円盤の高い機動力が知られるようになったことで、一般の人々の間にも宇宙人神話が浸透していったのか、もしくは宇宙人神話が浸透していったことで空飛ぶ円盤に高い機動力があるとされるようになったのか、どちらが原因でどちらが結果なのかを決定することは難しい。

しかし少なくとも、宇宙人神話それ自体は、空飛ぶ円盤の持つ高い性能に裏打ちされていたということは言える。それと並んで、年間平均で500件以上もの空飛ぶ円盤目撃が報告され、アメリカを代表する一流紙の第一面に空飛ぶ円盤についての記事が掲載され、さらにギャラップ機関の世論調査に対して9割を超える人々が空飛ぶ円盤について情報を得たことがあると答えた事実は、1947年のケネス・アーノルドによる空飛ぶ円盤目撃事件を契機として、宇宙人は我々人類よりも優れた存在であるというアイディアが多くの人々の間に浸透していたということを証明している。

#### 4. 空飛ぶ円盤とアメリカ

ところで、人工の物体もしくは自然現象かどうか確認できない飛行物体を見かけてそれを宇宙人の乗り物だと考えることと、米国あるいはソヴィエトの秘密航空機だと考えることとの間には大きな隔たりがある。そして、なぜこのアイディアはアメリカにおいて神話化したのか、という疑問も呈される。このことは、ピーブルズによる研究が採用した社会的な側面からの考察だけでは説明できない事態である。木原は、『UFOとポストモダン』において、その隔たりについて思想的、文化的な側面から以下のように説明した。

木原は、円盤神話が生まれた原因を、第二次世界大戦を契機とした「近代のプロジェクト」に対する不信感に求めている<sup>(28)</sup>。元来は、ドイツの社会学者、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) によって提示された「近代のプロジェクト」という概念は、木原によれば、社会や思考が合理化し進歩していけば人類は幸福になる、と考えるナイーブな楽観のことである。しかし、その楽観は、第二次世界大戦という「近代の」危機によって打ち砕かれてしまった。大戦における人的および物的破壊の規模が、未曾有だったことは言うまでも無い<sup>(29)</sup>。

第二次世界大戦後にはアメリカがヨーロッパを凌ぎ、近代の最先端を走っていた。つまり、アメリカは様々な面で他の国にひとつの近未来像を提供していたと言える。しかし、アメリカ自身にはそれを提供してくれる存在が欠けていた。アメリカにおいて空飛ぶ円盤神話が生まれ、かつ広く浸透していることの理由は、まさにこの点にあると木原は主張している<sup>(30)</sup>。

アメリカには「近代のプロジェクト」の掲げる青写真があったが、第二次世界大戦によってその楽観にも疑問符がついてしまった。そのために、そこに描かれた未来と現在との間に微妙なひびが入った。そのひびから偶然垣間見えたのが天空の光点だった、と木原は続けている<sup>(31)</sup>。

この説には大きな意義がある。ピーブルズの研究では、空飛ぶ円盤神話がアメリカにおいて誕生した理由については十分に明らかにすることができなかった。しかし木原は、思想的あるいは文化的なアプローチから考察することによって、

それを説明したのである。また、地球外にいる優れた存在というアイディア自体は古くから存在しているが、そのアイディアが急速に広まったのは第二次世界大戦後以降であるという事実は、「近代のプロジェクト」に対する不信感という説を強く裏づけている。

## 5. スペース・ブラザー誕生の必要条件

これまで概観してきたように、宇宙人の存在というアイディアの起源は古代ギリシアにまで遡ることが出来るものだった。しかし、それが神話化するには、第二次世界大戦によって引き起こされた「近代のプロジェクト」に対する不信感の高まりを待たなければならなかった。

「近代のプロジェクト」が揺らいだ結果、空飛ぶ円盤と宇宙人に関する言説がアメリカに誕生することになった。1947年のケネス・アーノルド事件は、その発端だった。そして、宇宙人は我々よりも優れているというアイディアも同様に具体的な形を取り始め、また一般の人々の間に広く知られるようになった。空飛ぶ円盤と宇宙人についての言説は、アメリカだからこそ誕生し、神話化したのだといえる。

宇宙人の優位性というアイディアが具体化し、神話化していく過程においては、空飛ぶ円盤が持つとされた高い機動性能が重要な役割を持っていた。空飛ぶ円盤は、人類の持ち得る航空機の性能をはるかに凌駕していたとされた。そのことが、宇宙人の優位性をより強く裏付けることになった。つまり、宇宙人は我々よりも優れているということが、多くの人々の間で半ば事実として囁かれるようになったのである。そしてこれこそが、以降概観していくように、スペース・ブラザーが信奉の対象となるための必要条件であり、文化的な下地だったのである。

## Ⅲ. スペース・ブラザー

### 1. コンタクティー

テンプル大学の歴史学科準教授であり、ピーブルズや木原の研究に大きな影

響を与えたデイヴィッド・M・ジェイコブズ (David Michael Jacobs) は、著作 *UFOs and the Search for Scientific Legitimacy* において、何人かの代表的なコンタクティーを挙げている。哲学を教えていたジョージ・アダムスキー (George Adamski)、機械修理工だったトルーマン・ベスラム (Truman Bethurum)、ロケットエンジン技師をしていたダニエル・フライ (Daniel Fry)、自営の看板職人だったハワード・メンジャー (Howard Menger) などである。ジェイコブズによれば、彼らコンタクティーは互いに面識があり、その主張を補強しあっていた<sup>(32)</sup>。

コンタクティーたちはスペース・ブラザーとの経験や、彼らから学んだとされる教えを聴衆に語りかけ、多くの信奉者を獲得して集団を形成している。1950年代の半ばには、全米で150を超えるほどのコンタクティー系の研究会が存在した。またコンタクティーたちは、カリフォルニア州にあるジャイアント・ロックと呼ばれる場所で、定期的に集会を開いていた。1954年3月に開催された最初の集会には、5,000人以上の参加者があったという。さらにコンタクティーたちは、テレビやラジオ、新聞などのメディアに幾度となく露出し、多くの著作を出版している<sup>(33)</sup>。

上記の代表的なコンタクティーたちを例に採れば、アダムスキーは、最終的に10万部以上を売り上げた『空飛ぶ円盤は着陸した (*Flying Saucers Have Landed*)』を1953年に、1955年には『宇宙船の内部 (*Inside the Space Ships*)』を出版した。また、ベスラムは1954年に *Aboard a Flying Saucer* を、フライは同じく1954年に *White Sands Incident* を、メンジャーは1959年に *From Outer Space to You* を出版している<sup>(34)</sup>。

ここで一つ補足しておきたいのだが、アダムスキーは詐欺師だったということが従来の研究によって既に明らかにされている。彼が撮影した空飛ぶ円盤の写真は、1950年代当時からトリックであることが判明していた。また、アダムスキーが披露した宇宙人とのコンタクトの内容は、彼が1949年に発表した『宇宙のパイオニア』というSF小説のストーリーに酷似している<sup>(35)</sup>。

さらに、アメリカでは禁酒法時代においても宗教上の目的であれば酒類を製造

することが許可されていたが、アダムスキーはそれを逆手に取り「チベットの高貴な騎士団（The Royal Order of Tibet）」という宗教団体を結成し、ワインを製造していたという<sup>(36)</sup>。

また、「チベットの高貴な騎士団」は、神智学（Theosophy）と呼ばれる、東洋思想の影響を強く受けた宗教を基礎に据えた団体であり、彼はその教えをスペース・ブラザーに語らせたに過ぎない、ということがデイヴィッド・リース（David Reece）によって明らかにされている<sup>(37)</sup>。

ただ先に述べたとおり、本稿の目的はアダムスキーらコンタクティーを詐欺師だと糾弾することにあるわけではないということを、再度強調しておきたい。むしろ注目すべきは、なぜそのような彼らが主張したスペース・ブラザーとのコンタクト・ストーリーが、少なからぬ人々に受け入れられたのかという点だ。ここではまず、世界初のコンタクトとされるアダムスキーによるスペース・ブラザーとの出会いを示し、彼らの特徴をまとめることにしよう。

## 2. 最初のスペース・ブラザー

アダムスキーとイギリスの作家であるデズモンド・レズリー（Desmond Leslie）の共著、『空飛ぶ円盤は着陸した』には、スペース・ブラザーと初めてコンタクトを行ったとされる際の様子が描かれている。それは、1952年11月20日のことだったという<sup>(38)</sup>。以下はその叙述である。

当時アダムスキーは、宇宙人とコンタクトをとることを望んでおり、空飛ぶ円盤が目撃されたという砂漠地帯へ何度も出向いていた。その旅行には、彼の哲学の授業を受けていた生徒たちと行くのが習慣だった。11月20日には、アダムスキーとその一行はカリフォルニア州の砂漠へと出かけた。一行がデザートセンターに到着して昼食をとっている際に、「巨大な葉巻型で銀色をした一機の宇宙船」が現れたという<sup>(39)</sup>。

その宇宙船を追うために、一行はハイウェイから外れた砂漠の只中へと車を走らせた。そして、アダムスキーは彼一人のみを砂漠に残すように生徒たちに伝え

て、彼らをそこから離れさせた。車が走り去って5分が過ぎたとき、一機の小型の飛行体が現れたという。それは、先ほどの葉巻型の母船から放たれたものだった。そして、アダムスキーは約400メートル前方に立つ、一人の人間を発見した。アダムスキーは、その人物へと接近していった。そしてお互いの距離が腕の長さ以内になったときに、アダムスキーはその相手が宇宙から来た人間であることに気づいた<sup>(40)</sup>。

そのとたんに、私は初めて自分が宇宙から来た人間の目前ににいるということにはっきり気づいたのである－別な世界から来た人間なのだ！<sup>(41)</sup>

アダムスキーは英語とジェスチャーとテレパシーを使って、その人物と意思を伝え合った。彼は、金星から来たということが分かった。また彼は、核爆発の際に発生する多量の放射線を心配しているということが分かった。放射能は地球だけではなく、太陽系の他の惑星にも悪影響を与えるのだという。また彼の態度は友好的であり、顔には人類に対する理解にあふれた微笑みが浮かんでいた。そしてその容姿の美しさは、これまでにアダムスキーが見てきた何ものにも勝っていたという<sup>(42)</sup>。

アダムスキーが遭遇したというスペース・ブラザーには、その後に現れたとされる他のスペース・ブラザーたちに共通する特徴をすべて兼ね備えている。それらの特徴とは、第一に外見の美しさ、第二に慈愛と理解に満ちた態度、第三に地球人の有する核への警告、そして第四に、空飛ぶ円盤の中で披露された極めて高度な科学・技術である。次は、これらの特徴が他のスペース・ブラザーたちにはどう表れていたのかをみていく。

### 3. スペース・ブラザーの四つの特徴

#### a. 外見の美しさ

従来の研究者によって指摘されているように、スペース・ブラザーたちはみな、

絶世の美男と美女たちだとされた<sup>(43)</sup>。機械修理工だったベスラムは、クラリオン（Clarion）という惑星から来たオーラ・レインズ（Aura Rhanes）と名乗る女性とコンタクトを取っている。彼は、著作 *Aboard a Flying Saucer* において、オーラの外見について述べている。

ベスラムによれば、オーラの身長は、地球の男よりも僅かに背が低かった。彼女の滑らかな肌は美しいオリーブとバラの色であり、茶色の瞳が輝く笑顔は彼女の顔をよりいっそう魅力的なものにした。彼女はメイクをしていないように見えたが、そのようなものは全く必要がないほど、彼女の美しさは比類のないものだったという<sup>(44)</sup>。

自営の看板職人だったメンジャーの著作、『外宇宙からあなたへ』にも、彼が出会ったとされるスペース・ブラザーの美しさについて述べられているくだりがある。当時暮らしていたニュージャージー州の小川のそばで、彼が初めて会ったスペース・ブラザーは女性であった。それは、メンジャーが10歳の時だった。メンジャーは、その時の様子を以下のように描写している。

彼女はわたしのほうへ顔を振り向けた。私はまだ子供であったが、そのときに感じたものは紛れもないものだった。彼女から私へ発せられてきたものは、溢れるような暖かさと愛情、そして女性としての魅力であった。（中略）

彼女は何も化粧はしていなかったが、うっすらと桃色がかった椿のような繊細で透き通った肌には、何も重ねる必要はなかっただろう。彼女の瞳は、金色の光彩を放つオパールのような玉のようで、穏やかにきらめく潤いを湛えながら、ほほ笑みかけるような愛情を私へ注いでいた<sup>(45)</sup>。

## b. 慈愛と理解に満ちた態度

上記のメンジャーによれば、他人同士が平和に共存できる社会を実現しようとした人類による試みは、すべて失敗に終わっているという。それを妨害したのは、肌の色や信条が異なるもの同士の間に生まれた嫉妬、欲望、憤慨、そして誤解で

あった。そして、いつも最後には憎しみだけが残った。時にはそれは、精神的苦痛と同様に、身体的な苦しみをももたらす結果となり、拷問、殺戮、そしてあげくの果ては戦争すら引き起こし、お互いに相容れない関係に力づくで決着をつけようとした<sup>(46)</sup>。

このような人類と対比されているのが、スペース・ブラザーたちの態度である。彼らは、メンジャーと接するときは常に、微笑みとユーモアを絶やさなかったという。彼らは謙虚であり、メンジャーに対する親愛の情に溢れていた。メンジャーがこのような「素晴らしい人たち」と握手を交わした際に感じたのは、「筆舌に尽くしがたいほどの歓喜のフィーリング」だったという<sup>(47)</sup>。

また先述のように、アダムスキーのスペース・ブラザーはコンタクトの際に、地球の核実験と放射能を話題に上げていた。アダムスキーによれば、その時、スペース・ブラザーの顔には立腹や非難の様子はみられなかったという。むしろ、そこには「理解と大いなる憐れみ」が浮かんでいた。ちょうどそれは、「無知と理解力の無さによって過失をおかした愛すべき幼児に対して人が抱くような憐れみの感じ」だった、とアダムスキーは続けている<sup>(48)</sup>。このように、コンタクティーらが語ったスペース・ブラザーたちの人類に対する態度には、慈愛と理解が満ち溢れているとされた。

### c. 核あるいは冷戦に対する警告

ジェイコブズやピーブルズによって指摘されているように、スペース・ブラザーたちがコンタクティーらに語ったとされる物語には、冷戦の緊張の高まりによって引き起こされかねない核戦争と、核兵器の爆発から発生する放射能に対する危機感を見出すことが出来る<sup>(49)</sup>。アダムスキーの場合、その様子は以下のようなものだった。

相手は両手のジェスチャーによって核爆発から起こる雲を示しながら、こんな爆発があまり多く行われるならば危険だということを私に理解させた。

そうだ！相手の肯定的なうなずきは極めて積極的で、この場合は「イエース」という言葉さえ発した。両手と腕の動作で雲の形を描くのは容易だが、爆発を表現するために相手は「ポーン！ポーン！」と言った。続いてさらに説明するために相手は私に触れて、次にそばに生えている雑草に触れ、次に大地を指さして、両手を大きく回したりその他のジェスチャーなどによって、あまり多くの「ポーン！」を繰り返すとみんな破壊されるという意味をあらわした<sup>(50)</sup>。

ロケットエンジン技師だったフライの著作 *White Sands Incident* にも、冷戦を意識したと考えられる叙述がある。フライが出会ったと主張した宇宙人はアラン (Alan) という名であった。アランが語ったところによれば、彼の種族は過去に、ムー (Mu) もしくはレムリア (Lemuria) と呼ばれる、太平洋に存在していた大陸で、偉大な文明を築いていたという。そして同時代に、別の種族たちもアトランティス (Atlantis) と呼ばれていた大陸に、レムリアに匹敵するほどの文明を築いていた。しかし、両文明の科学技術は、お互いを破壊しつくすほどの水準にまで達してしまった。最終的に少数の者たちが、その破滅を逃れて宇宙へと脱出した。彼らの子孫であるアランたちは、その教訓を生かすためにコンタクトにやって来ているのだという<sup>(51)</sup>。ここで語られたお互いを破壊しつくすほどの科学力は、明らかに核による世界破滅を示唆している。

#### d. 空飛ぶ円盤の内部と高度な科学技術

アダムスキーは、1952年11月20日のファースト・コンタクト以降にも、金星人とのコンタクトを続けていたという。彼の二作目となる著書『宇宙船の内部』には、彼が空飛ぶ円盤に搭乗してスペース・ブラザーと宇宙旅行をしたという内容の叙述がある。その描写には、スペース・ブラザーが持つ高度な科学・技術に対する強い驚きと憧れがにじみ出ている<sup>(52)</sup>。

1953年2月18日、彼は火星人のファーコン、土星人のラミュー、そして金星

人のオーソンに招かれて、空飛ぶ円盤に乗り込んだという。その際に最初に目に入ったものが、円盤の天井から床の中心を貫いている円柱だった。これは円盤の磁気柱であり、これによって自然力を利用しながら推進することだった。また、壁には床から天井に届くグラフやチャートの類も目に入った。これらの意味や機能は説明されなかったが、説明されたとしても全く理解できなかっただろうと、アダムスキーは続けている<sup>(53)</sup>。

入り口のドアが全く見えなくなってしまったことも驚きだった。つまり、継ぎ目が見えなくなるほどに、機体の各部分を組み立てることができる「信じられないほどの技術」をスペース・ブラザーたちは持っていた<sup>(54)</sup>。

またアダムスキーは、円盤が離陸していたことに気づけなかったという。なぜなら、強烈な加速度や地球の飛行機に乗った場合に見られるような気圧の変化、そして離陸時の引っ張り上げられるような感覚を全く感じなかったからだ。しかし、それにもかかわらず、円盤はたった数分で高度約12,000メートルに達した<sup>(55)</sup>。

地上3,200メートルを飛行しているのにもかかわらず、地上30メートルからの眺めと変わらないように拡大できる望遠鏡も、彼を驚かせた。この光学装置は、高度数十キロメートルからでも地上の個々の人間を見分けることができるという。これが電子工学的なものか、それともほかの方法によるものかは、スペース・ブラザーたちは説明してくれなかった。倍率は自由に加減できそうで、われわれが地球で知っているような単純な光学機械どころの段ではないのだろうと、アダムスキーは考えた。彼にとっては目に入るもの全てが驚嘆だった。どこから見てもいいか見当がつかなかったと、彼は続けている<sup>(56)</sup>。

#### IV. 1950年代のアメリカ

ここでは、なぜスペース・ブラザーたちに上記の四つの性格が与えられたのかについて、時代背景と照らし合わせながら考察したい。特に注目すべき特徴は第一に核と冷戦への警告、第二に空飛ぶ円盤において披露されたという科学・技術の高さである。なぜなら、これら二つの特徴こそがスペース・ブラザーを他なら

ぬ1950年代において信奉の対象足らしめた要因だからである。

## 1. 冷戦と核兵器

コンタクティーらが現れた1950年代初頭は、冷戦がその緊張の度合いをより一層高めていた時期だった。東西対立は、1947年のトルーマン・ドクトリンの発表によって顕在化し、マーシャル・プランがそれに続いた。いわゆる赤狩りが始まったのも、1947年である。これは、アメリカにおける反ソヴィエト・反共産主義の高まりの一例として考えることができる。1948年にはソヴィエトがベルリンを封鎖し、アメリカは空輸という形でそれに応えた。1949年には中華人民共和国が成立し、最終的には1950年から始まった朝鮮戦争によって、冷戦の状況はより一層深刻化していった。この世界を二分した冷たい戦いは、人類史上例のないものだった。

冷戦の危機的な状況を決定付けたのが、水素爆弾の開発だった。アメリカにおける水素爆弾の開発は、エドワード・テラー（Edward Teller）らによって第二次世界大戦後に始められた。リチャード・ローズ（Richard Rhodes）によれば、初の水素爆弾の実験は、1952年11月1日に行われた。「マイク（Mike）」と名づけられた、この水素爆弾の爆発による火球は、爆発から数秒のうちに直径3マイル（約4.8キロメートル）以上に膨れ上がった。実験を見学していた特殊部隊の隊員の一人は、爆破地点から30マイル（約48キロメートル）離れていたにもかかわらず、爆発の瞬間に熱いオープンを開けたときのような熱を感じた。それは、脅威を感じるほどに長く続いたという。また、爆心地であったエルゲラブ島（Elugelab）は完全に消滅し、その跡には深さ200フィート（約60メートル）、直径1マイル（約1.6キロメートル）のクレーターができた。「マイク」の破壊力は、10.4メガトンと算定された。これは、広島に落とされた原子爆弾の、実に約1,000倍もの威力だった<sup>(57)</sup>。

さらに、1957年10月4日には、人類史上初となる人工衛星のスプートニクがソヴィエトによって打ち上げられた。この事件は、アメリカ国内に強い衝撃をもた

らした。いわゆるスプートニク・ショックである。バーバラ・クロウズ (Barbara Barksdale Clowse) によれば、スプートニク危機 (Sputnik Crisis) は、冷戦時代における真珠湾攻撃のようなものだったという。人工衛星をロケットに載せて打ち上げるための技術をソヴィエトが持ったということは、核兵器をミサイルに載せて打ち上げる技術を、彼らがアメリカよりも先に持ってしまったということの意味していたからである<sup>(58)</sup>。

水素爆弾が開発されたことによって、戦争はその意味を変えた。水素爆弾は、たった一発で大都市を灰燼に帰することの出来る未曾有の兵器だった。その破壊力は、これまでの原子爆弾とは比較にならないものだった。そして、スプートニクによって始まった大陸間弾道ミサイルの開発の歴史も、その意味の変化に追い討ちをかけた。ミサイルに核弾頭を搭載することで、爆撃機で行うよりも容易に大規模な核攻撃ができるようになってしまったからである。米ソによる核開発競争は、より一層加速していた。冷戦に火がつくということは、まさに、世界の終わりを意味したのである。スペース・ブラザーたちが人類の有する核と、一層激化しつつあった冷戦に対して警告を与えてきたとコンタクティーたちが主張した理由は、まさにこの点にあった。

また1950年代アメリカの映画には、核戦争に対する不安感や無力感を表現しているものが多く見られた。1953年の *The Beast from 20,000 Fathoms* を初めとして、1954年には『ゴジラ』、1955年に *World without End*、1956年に *X The Unknown* と *The Day the World Ended* が、また1958年に *Teenage Cave Man*、そして1959年には『渚にて (On the Beach)』など、冷戦と核の恐怖が生み出した映画が1950年代には多数誕生している。また、これら一般の娯楽作品以外のいわゆるB級映画にも、冷戦と核をテーマにした作品が多々ある<sup>(59)</sup>。

これらの映画の中で最もよく知られている作品は、スタンリー・キューブリック監督による『博士の異常な愛情：または私は私は如何にして心配するのを止めて水爆を・愛する・ようになったか ("Dr Strangelove – Or, How I Learned to Stop Worrying and Love the Bomb")』だろう。この作品の公開は1964年だが、1950年

代の冷戦恐怖症を風刺したものであった。同時に、核による世界終焉の可能性が実際に高いということに対する、冷戦期アメリカのニヒリズムを描いたものでもあった<sup>(60)</sup>。

この作品は、アメリカ空軍のジャック・D・リッパー将軍が、ソヴィエトに向けて先制核攻撃を命令するところから始まる。彼は精神に異常をきたしており、ソヴィエトが世界中の水道水にフッ素化合物を混入させていると信じていたことが、先制核攻撃の理由だった。リッパー将軍のある部下は、核爆弾を乗せたB-52を呼び戻そうとするが、結局その内の一機はそれをくぐり抜けてソヴィエトの基地に核兵器を投下してしまう。それによって、ソヴィエトが秘密裏に所有していた「皆殺し装置（Doomsday Machine）」が発動し、世界は唐突に終わりを迎えてしまう<sup>(61)</sup>。

この作品の主人公の名は、19世紀ロンドンを震撼させた連続殺人鬼、ジャック・ザ・リッパー（Jack the Ripper）に因んだものと容易に推測できるが、そのような精神異常者が引き起こした事故によって、世界が偶発的に終わりを迎えてしまうことは、この上なく不条理であるといえる。『博士の異常な愛情』は、この不条理さと不安感をブラック・ユーモアという形で巧みに描き出していたといえるだろう。

そして、この不条理かつ危機的な状況を避けさせるためにスペース・ブラザーたちが示した道筋とは、人類が彼らのように生活するという他になかった。つまり、スペース・ブラザーたちのように、他者に対する理解と愛情と親切さ、謙虚さなどが必要だとされたのである。

しかし、外見の美しさや他者に対する慈愛と理解に満ちた態度というのは、時代を問わずに受け入れられる価値であろう<sup>(62)</sup>。むしろ1950年代において特に歓迎されるべきだったのは、核による危機の回避と恒久平和であり、それらを達成しているとされたスペース・ブラザーは、尊敬と信奉に値する人々だったといえる。

しかし、スペース・ブラザーを信奉の対象足らしめる重要な要素だったのは、平和の達成だけではなかった。スペース・ブラザーたちが極めて高度な科学・技

術を操っていたことを忘れてはならない。

## 2. 科学・技術と大量消費社会

一般大衆向けの雑誌などに掲載されていた広告からは、物質的に豊かな生活に対して、1950年代の人々が強い憧れや期待を抱いていたことが読み取れる。ここでは、1952年4月7日付の『ライフ』誌を例に挙げる。なお1952年は、アダムスキーが初めてスペース・ブラザーとコンタクトをとった年である。

紙面では、化粧品や衣料品、缶詰やハム、アイスクリームなどの食品の広告に混ざって、当時においては最先端だった数々の工業製品、例えばテレビやラジオ、レコード、電子壁掛け時計、乗用車、掃除機、洗濯機、電子制御のオーブン、冷蔵庫、アイロン、医薬品などの広告を見つけることができる。それらに描かれる人々の顔は図版2-5にあるように、どれもが明るい笑みに満ちており、また同時に、見る者に対してどこか誇らしげな印象を与える<sup>(63)</sup>。

象徴的であるのは、“*Compare Futurized Raytheon TV*”と題された、テレビの広告だ。その広告では、1952年当時において最新型だった、レイセオン（Raytheon）社の17インチテレビ、*The Commander, M-1726*の前に、兄妹と思われる二人の子供が座している様子が描かれている。彼らは笑顔であり、妹がチャンネル選択のノブを回している。注目すべきは、そのテレビの画面に“1962”という文字が映し出されていることである<sup>(64)</sup>。

子供たちは、1952年のテレビのブラウン管の中に10年後の未来を見て、無邪気に笑っていた。この無邪気さは、子供たちの未来に希望を託せられるほどに、当時のアメリカが自信に満ちていたことを象徴的に表しているといえるだろう。その自信は、比肩する国が他に無いほどに当時のアメリカが科学・技術の先端を走っていたことと、それが作り上げた豊かな生活をアメリカが享受していたことに起因している。

アメリカにおける1950年代は、数々の工業製品が安価に大量に製造されるようになり、国民一般にも広く普及し始めた時代だった。テレビ、ラジオ、冷蔵庫、

図版 2. *Life*, 7<sup>th</sup> April 1952. の表紙  
空飛ぶ円盤 (Interplanetary Saucers) の特集が組まれている。

画像不掲載

図版3. Hotpoint社の電気制御オーブンの広告 (*Life*, 7<sup>th</sup> April 1952, 98.)

画像不掲載

図版 4. Philco 社の “2-Door” 冷蔵庫の広告 (*Life*, 7<sup>th</sup> April 1952, 1.)  
冷凍庫が付属していることが強調されている。

画像不掲載

図版 5. American Cyanamid Company (Lederle) 社の医薬品の広告  
(*Life*, 7<sup>th</sup> April 1952, 48-49.)

「現代医療によって駆逐された殺人病原菌 (“the great killer-germs conquered by modern medicine”)」というキャプションが付き、肺炎、チフス、髄膜炎、ロッキーマウンテン発疹熱、亜急性細菌性心内膜炎を引き起こす病原菌類と、それらと闘う科学者たち、“Warriors against Death” のイラストが、笑顔の少女と共に描かれている。

画像不掲載

図版 6. Raytheon社のテレビの広告 (*Life*, 7<sup>th</sup> April 1952, 8.)

画像不掲載

洗濯機、車など、様々なモノに囲まれた生活こそが、豊かさの象徴とされた。また、第二次世界大戦終結の1945年から1960年代にかけて、国民総生産（Gross National Products / GNP）は2.5倍に増加し、失業率は5%以下にとどまっていた。それに加えて、可処分所得の総額は、1950年の2,070億ドルが、1960年には3,500億ドルに増加した。所得が全体的に上昇して中産階級が膨らみ、下層階級の人々が急速に中産階級的な生活スタイルや意識を身に付けるようになった。つまり個人消費の大幅な増加によって、アメリカには世界のどこよりも早く大量消費社会が到来したのである<sup>(65)</sup>。そして、この生活を支える基盤こそが科学・技術に他ならなかった。

先にみたように、空飛ぶ円盤はそもそも、宇宙人たちの工学的な科学・技術の優位性を示す存在だった。空飛ぶ円盤は、非常に高度な飛行性能を有していると考えられた。音速を悠々と超えるほどの航行速度に加えて、驚異的な加速度と操作性、旋回性など、空飛ぶ円盤には、人類の持ちえる最高の航空機を遥かに超越した科学・技術が使用されているとされた。アダムスキーが乗ったという空飛ぶ円盤は、まさにこの種の乗り物だった。

また、1950年代における宇宙空間は、人類にとっては活動の範囲外にあったということも指摘したい。人類による大気圏脱出は、1957年のソヴィエトによるスプートニク 1 号によって初めて達成されたが、スプートニク 1 号は人が搭乗できない人工衛星だった。有人の装置が宇宙空間へ達するには、1961年のソヴィエトによるヴォストーク 1 号を俟たなければならなかった。しかし、このユーリイ・ガガーリンによる世界初の有人飛行も、地球を一周するというささやかなものに過ぎなかった<sup>(66)</sup>。当時、ロケット工学においては世界最先端だったソヴィエトの科学・技術の能力を以てしても、宇宙旅行達成への道のりは依然として厳しいものであったのである。

そのような時代において、宇宙人たちは、金星などから悠々と日常的に有人惑星間飛行を行い、地球へとやって来ているとされた<sup>(67)</sup>。空飛ぶ円盤はまさに、宇宙人たちが有するという圧倒的な科学・技術の象徴だったのである。そして、

ジェイコブズやリース、木原などの研究者たちは伝統的に、このような「物理的・機械的・工学的なアメリカ流の」<sup>(68)</sup> 空飛ぶ円盤のイメージを、本来は「根本的、基本的な」という意味である、「ナットとボルト (nuts-and-bolts)」<sup>(69)</sup> という専門用語で形容している。

この、ナットとボルト的な科学・技術、つまりメカニカルで無骨な、力強い工業機械を連想させるような科学・技術こそが、1950年代のアメリカにおいて歓迎され、理想とされた科学・技術だったといえるだろう。むしろ、1950年代においてはその成功が故に、他の形の科学・技術が想定されなかった<sup>(70)</sup>。この科学・技術は、人々の生活水準を向上させ、大量消費社会、いわば物質主義的な社会を誕生させる基礎となるものだった。

自動車や電子時計、テレビ、ラジオ、レコード、医薬品、電子オープン、洗濯機、冷蔵庫などの、1950年代に急速に広まった工業製品はどれも、ナットとボルト的な科学・技術なしには誕生し得なかったであろう。これらの工業製品に囲まれた生活こそが、当時のアメリカの憧れであり、希望でもあった。

スペース・ブラザーたちが空飛ぶ円盤の中で高度な科学・技術を披露したとされたのは、1950年代においては科学・技術こそが明るく豊かで清潔な未来を生み出すものとされたからである。空飛ぶ円盤は宇宙人たちの有する圧倒的な科学・技術の象徴であり、その内部が語られたことによって、スペース・ブラザーの科学・技術の高さとそれが故の彼らの幸福な生活が、より一層強調されることになったのである。

## V. 結論

これまでみてきたように、宇宙人と空飛ぶ円盤についての神話が誕生した背景には、「近代のプロジェクト」に対する不信があった。科学・技術は「近代のプロジェクト」の重要な構成要素であることは言うまでもない。「近代のプロジェクト」への不信感が高まった結果、空飛ぶ円盤と宇宙人に関する言説が誕生し、1950年代の宇宙人、スペース・ブラザーも誕生した。

時代はスペース・ブラザーたちに、四つの特徴を与えた。それらは第一に外見の美しさ、第二に慈愛と理解に満ちた態度、第三に核と冷戦に対する警告、そして第四には高度な科学・技術だった。その中でも特に、第三と第四の特徴がスペース・ブラザーを1950年代に特有な信奉対象に仕立て上げた。

スペース・ブラザーたちは人類よりも遥かに優れた存在とされたが、特に、科学・技術において優れていた。それは、スペース・ブラザーが操縦していた空飛ぶ円盤内部の描写に顕著に表れていた。アダムスキーがそこで見たとされたものは、スペース・ブラザーたちの持つ、圧倒的な科学・技術だった。音もなく閉じられるドア、継ぎ目が分からないように各部を組み立てることができる技術、磁気を利用した航行原理、離陸したことに気がつかないほどの乗り心地と、高度数十キロメートルの高度にありながらも地上の個々人を見分けることができる光学装置など、どこから見ていけばよいか見当がつかないほどの科学・技術が、空飛ぶ円盤には用いられていた。スペース・ブラザーたちは、ナットとボルト的な科学・技術が生み出した輝かしい成果を享受していたとされたのである。

また、スペース・ブラザーたちは、惑星間飛行を日常的に行うほどの科学・技術を持ちながらも、核兵器や戦争などによる破滅からは自由な存在だった。1950年代のアメリカにおける科学・技術の進歩は目覚しく、大量消費社会が到来し、人々は結果として、物質的な豊かさを手にすることが出来るようになった。だが同時に、科学・技術の発展は、水素爆弾や大陸間弾道ミサイルなどの製造を可能にした。『博士の異常な愛情』で描かれたように、世界が核兵器による破滅を迎えることも十分に起こりえる状況にあった。そのような人類とは対照的に、スペース・ブラザーたちは核兵器や戦争のない平和な文明を維持しているとされた。

ナットとボルト的な科学・技術は世界のどこよりも早く、他でもない1950年代のアメリカに、相反する二つのことを生み出した。それは第一に大量消費社会、第二に冷戦や核兵器による世界の終焉の可能性だった。これら二つに対する憧れと恐れは、科学の時代、1950年代アメリカに特有な感情だったといえるだろう。

それが故に、スペース・ブラザーたちも科学・技術を完全に制御する存在、いわば科学・技術の二面性を乗り越えた存在であることが求められた<sup>(71)</sup>。その結果、スペース・ブラザーという神話も少なからぬ人々から注目され、受容されたのである<sup>(72)</sup>。

ここで一つ付け足すべきことがある。それはリースも指摘するように、彼らスペース・ブラザーは我々人類よりも優れた存在だったがあくまで人間であり、神ではなかったということだ<sup>(73)</sup>。彼らは我々よりも先に宇宙に生まれたが故に、進化しているに過ぎなかった。彼らは人類にとってのブラザー、兄弟だった。事実、スペース・ブラザーたちは死を免れない存在だとされたし、彼らも彼らの神を信仰しているとされた。アダムスキーによれば金星人の平均寿命は約1,000年であり、「無限の父」と呼ばれる神を信仰していたという<sup>(74)</sup>。

スペース・ブラザーたちでさえも死を乗り越えていなかったとされたことは彼らの不完全性を意味していたが、これは逆説的に、人類の進化の可能性をも意味していたといえるだろう。なぜなら、スペース・ブラザーたちは我々人類と同様に不完全な存在だったにも関わらず幾多の困難を乗り越えており、理想的な文明を築き上げていたからである。だからこそ、彼らはアメリカの理想像、あるいは未来像足り得たのである<sup>(75)</sup>。

また、地球人に愛と平和のメッセージを伝えにやって来たスペース・ブラザーたちの姿は、アメリカ自身の姿と捉えることもできるだろう。19世紀アメリカの会衆派牧師、ジョシュア・ストロング (Josiah Strong) は、1885年に *Our Country* を著し、「最大の自由・純粋なキリスト教・最高の文明」というプロテスタント理念を広めることは、アメリカに課せられた世界史的な使命だと論じた<sup>(76)</sup>。世界のどこよりも優れたアメリカが利他的な動機をもって世界に文明と福音を広めるという構図は、我々よりも優れたスペース・ブラザーが利他的な動機をもって地球を訪れ、人類に道を示すという構図と重なるものである。スペース・ブラザーはアメリカにとっての理想像、未来像であり、自己像でもあったのかもしれない。

1980年代に入りコンタクティーとスペース・ブラザーが消え、新しい性質を持った信奉対象となる宇宙人たちが登場した理由は、ここに至って自ずと明らかになる。端的に言えば、スペース・ブラザーたちは徐々に時代の要求を満たせなくなっていったのである<sup>(77)</sup>。

1980年代にはもはや、核と冷戦はアメリカ最大にして共通の問題ではなくなっていた。当然ながら、依然としてそれらは大きな問題だった。しかし、アメリカが社会、政治、文化などの諸方面において冷戦と核以外にも様々な問題を抱えているということが、1960年代から1970年代を通して表面化してきており、核と冷戦に対する関心は相対的に低下したのである。

また、1970年代以降には、環境問題が広く意識されるようになった。そのきっかけとなったのが、1962年に出版されたレイチェル・カーソンによる『沈黙の春』である。この著作において、彼女はDDTを筆頭とした化学薬品を「死の霊薬」<sup>(78)</sup>に例えて、それらが環境に及ぼす様々な悪影響を示した。「自然は、人間の生活の役に立つために存在する」という当時支配的だった考えを、彼女は人類の思い上がりだとしている<sup>(79)</sup>。また、カーソンが告発した化学薬品以外にも、酸性雨やオゾンホール、森林破壊や各種の汚染などは、深刻なレベルに達しつつあった。

我々はもはや、既存の科学・技術に対して楽観的ではいられなくなってしまった。1950年代アメリカにおいてみられた、ナットとボルト的な科学・技術に対する無邪気とも言える信頼感は、激動の1960年代から1970年代を経て、徐々に不信心へと変化していったのである。

そのため、1980年代以降に信奉対象になった宇宙人たちは、空飛ぶ円盤にナットとボルト的な科学・技術を用いてはいない。また、彼らが警告する内容も核と冷戦よりもむしろ環境問題などに比重が移っている。つまり宇宙人たちは、それぞれの時代ごとに特有な問題関心を顕著に反映する存在なのである。スペース・ブラザーという奇妙な神話が科学の時代、1950年代のアメリカにおいて需要され、誕生し、少なからぬ支持を得たのはそれこそが故である。

## 注

- (1) ピープルズ最大の功績は、空飛ぶ円盤の目撃報告件数の高まりの背景には、冷戦の緊張の高まりが引き起こした「輪郭がはっきりしないような、あやふやな危機感」があったという研究を引き、空飛ぶ円盤神話と冷戦時代の社会不安との関係を論じたことである。カーティス・ピープルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』皆神龍太郎訳（文藝春秋、2002年）、551-554頁。
- (2) 木原の研究は、ピープルズの研究に大きく立脚している。また本稿は、木原の研究成果によるところが大である。木原善彦『UFOとポストモダン』（平凡社新書、2006年）。
- (3) ピープルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、205頁；木原『UFOとポストモダン』、41頁；David Michael Jacobs, *The UFO Controversy in America* (Bloomington & London: Indiana University Press, 1975), 115.
- (4) 1980年代に流行した宇宙人信奉および宇宙人像と、ニューエイジ・ムーヴメント、さらに1950年代と1980年代の宇宙人像の比較については、2008年3月に提出した筆者による修士論文「宇宙人像の変遷に見るアメリカの理想像：1950年代から1980年代にかけてのアメリカ文化」を参照。なお本研究は、同稿を基にしたものである。  
 付言すれば、1960年代以降に現れたコンタクティーで最も著名な者が、クロード・ボリロン（Claude Volrilhon）である。ボリロンは、1973年にフランスのクレルモン＝フェラン（Clermont = Ferrand）近くの火山地帯でエロイム（Elohim）と名乗る宇宙人とコンタクトしたとされ、彼の教団、ラエリアン・ムーヴメント（Raëlian Movement）は現在でも世界に5万5千人の信者を擁している。George D. Chryssides, "Scientific Creationism: A Study of the Raëlian Church," *UFO Religions*, Christopher Patridge, ed. (London and New York: Routledge, 2003), 49.
- (5) ピープルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、70頁；木原『UFOとポストモダン』、14頁。
- (6) 同上。また、米国空軍による空飛ぶ円盤調査団体、プロジェクト・ブルーブックを率いていたエドワード・ルッペルト米国軍空軍大尉（Capt. Edward Ruppelt）によれば、当初、空軍は空飛ぶ円盤（flying saucer）という言葉に対しては軽蔑的だった。空飛ぶ円盤に代えて、「より客観的（less colorful）」な「UFO」を公式用語としたのはルッペルトである。Edward J. Ruppelt, *The Report on Unidentified Flying Objects* (n. p.: Aegypan, 2007), 8, 14.
- (7) レオン・フェスティンガー『予言がはずれるとき：この世の破滅を予知した現代のある集団を解明する』水野博介訳（勁草書房、1995年）；ピープルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、202-203頁；島蘭進『精神世界のゆくえ：現代世界と新霊性運動』（東京堂出版、1999年）、45頁。
- (8) 上記の研究手法と目的は、木原のそれを参考にしている。木原『UFOとポストモダン』、7-8頁。

- (9) 遅くとも紀元前 6 世紀には、ピタゴラスが宇宙には地球と同じ様な世界があり、そこには住民がいるだろうと説いていた。アトム論で有名なデモクリトスや、アナクサゴラス、そしてエピクロスも同様の考察をしている。また、17 世紀以降のヨーロッパにおいては、ヴォルテールやシラノ・ド・ベルジュラックなどが地球外の生命について著している。しかしこれらの作品は、当時の社会情勢を風刺する色彩が強かったという。また、ケプラー、フォントネル、カントなどにも同様の著作がある。金子隆一『ファースト・コンタクト』（文藝春秋、1998 年）、64-71 頁；ヴォルテール「ミクロメガス」『浮世のすがた』池田薫訳（岩波書店、1953 年）所収、65-95 頁。

また当時、読書とは極めて少数だった知的階層に限られた活動だったことを考慮すれば、そのアイディアが広く一般まで知れ渡っていたとは到底言えない。

- (10) マイク・アシュリー『SF 雑誌の歴史：パルプマガジンの饗宴』牧真司訳（東京創元社、2004 年）、15、68 頁。なお、この種の雑誌はパルプマガジンと呼ばれることがある。それらが質の悪い、安価な木材パルプ紙に印刷されていたことがその由来である。
- (11) H・G・ウェルズ『火星入襲来』白木茂訳（集英社、1973 年）。
- (12) 木原『UFO とポストモダン』、19-20 頁。
- (13) デイヴィッド・シュトラウス『パーシヴァル・ローエル：ボストン・ブラーミンの文化と科学』井上正男監修、大西直樹訳（彩流社、2007 年）、243-249 頁。また、ローエルは冥王星探索の基礎を築いたことでも知られている。詳しくは同上、303 頁。
- (14) ピーブルズ『人類はなぜ UFO と遭遇するのか』、24-27 頁。『ニューヨーク・タイムズ』紙が初めて空飛ぶ円盤を扱った 1947 年 7 月 6 日付けの記事には、*flying disc*という言葉は散見されるものの、*flying platter*という表現は見つからない。ケネス・アーノルドによる目撃から二週間を経ない内に、早くも *flying saucer*という言葉が一般的な用法として使われていたことが分かる。なお、1947 年 7 月 6 日付の『ニューヨーク・タイムズ』紙には、*flying saucer*についての記事が四つ掲載されており、そのうちの一つは第一面にある。*New York Times*, 6<sup>th</sup> July 1947, 1, 36, 80.
- (15) ピーブルズ『人類はなぜ UFO と遭遇するのか』、39 頁；木原『UFO とポストモダン』、45 頁；Paris Flammonde, *The Age of Flying Saucers – Notes on a Projected History of Unidentified Flying Objects* (New York: Hawthorn Books, Inc., 1971), 242-243.
- (16) 目撃報告の総数および年間平均報告数は、ピーブルズ『人類はなぜ UFO と遭遇するのか』、39、57、87-88、114、130、212、243、278-279、294、302、323、358、367 頁から算出した。なお、367 頁には総数 12,628 件とあるが、12,618 件の間違いだと考えられる。自らの計算だけでなく、原書である Curtis Peebles, *Watch the Skies! : A Chronicle of the Flying Saucer Myth* (New York: The Berkley Publishing Group, 1995), 230. も参照して確認した。年平均は 12,618 件から算出し、小数点 2 桁以下は切り捨てとした。同様に、1952 年の一日あたりの平均件数も小数点 2 桁以下を切り捨てて算出している。
- (17) 当然のことながら、当時の米国が冷戦という状況下にあったことも考慮しなければな

らない。調査団体が発足した理由の一つには、空飛ぶ円盤がソヴィエトの秘密兵器である可能性があったということが、天体物理学者のカール・セーガンによって指摘されている。ソヴィエトの秘密兵器がアメリカの上空を飛行している可能性があることは、国防的観点からすれば一大事だった。なお、セーガンはプロジェクト・ブルーブックの米国空軍科学査問会のメンバーだった。カール・セーガン『人はなぜエセ科学に騙されるのか（上巻）』青木薫訳、（新潮文庫、1997年）、161-163頁。

- (18) The Gallup Organizationによる *The Gallup Poll #401, #455, #455tps, #499* から。回答数はそれぞれ、2995、1501、1343、2448人である。手法などの詳細については、<http://www.galluppoll.com>を参照。
- (19) ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、40、73、105、141-142頁。
- (20) Jacobs, *The UFO Controversy in America*, 37.
- (21) Tom Crouch, *Wings* (New York: W. W. Norton & Company, 2003), 458.
- (22) ブルックスミスによれば、その場で停止する能力を持つものや、ほぼ垂直に上昇するものも目撃されている。ピーター・ブルックスミス『政府ファイルUFO全事件：機密文書が明かす「空飛ぶ円盤」50年史』大倉順二訳（並木書房、1998年）、48頁。  
 なお繰り返しになるが、本稿ではこれらの空飛ぶ円盤の目撃報告が事実だったかどうかという点には敢えて重きをおかず、むしろ当時空飛ぶ円盤について何が言われてきたのかを把握することに努めたい。
- (23) ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、115-118頁；木原『UFOとポストモダン』、36頁；ブルックスミス『政府ファイルUFO全事件』、51頁。
- (24) *Life*, 7<sup>th</sup> April, 1952, 81; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、115-118頁。なお、*Life*紙の原文については、以下のとおりである。“3. These objects cannot be explained by present science as natural phenomena – but solely as artificial devices, created and operated by a high intelligence. 4. Finally, no power plant known or projected on earth could account for the performance of these devices.”
- (25) *New York Times*, 6<sup>th</sup> July 1947, 80; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、28頁。また、ピーブルズによれば、7月4日の前後に1947年最大の目撃騒動が米国北西部において発生している。同上、29頁を参照。
- (26) *New York Times*, 7<sup>th</sup> July 1947, 5: “We still haven’t the slightest idea what they (the discs) could be. But we don’t believe anyone in this country, or outside this country, has developed a guided missile that will go 1,200 miles an hour as some reports have indicated.” なお、引用中の the discs は、空飛ぶ円盤を指している。
- (27) また、ルッペルトによれば、初の空飛ぶ円盤調査団体だったプロジェクト・サインの調査官たちも、空飛ぶ円盤は宇宙人の乗り物であると信じていた。Ruppelt, *The Report on Unidentified Flying Objects*, 67; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、61-62頁。

- (28) 木原『UFOとポストモダン』、29-33頁。
- (29) ユルゲン・ハーバーマース『近代－未完のプロジェクト』三島憲一編訳（岩波現代文庫、2000年）、21頁；木原『UFOとポストモダン』、29頁。
- (30) 木原『UFOとポストモダン』、33頁。
- (31) 同上。
- (32) David Michael Jacobs, *UFOs and the Search for Scientific Legitimacy* (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1983), 110; 木原『UFOとポストモダン』、193-197頁。
- (33) Jacobs, *The UFO Controversy in America*, 109, 122-123; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、201-202、204頁。
- (34) Jacobs, *The UFO Controversy in America*, 110-114; Gregory L. Reece, *UFO Religion : Inside Flying Saucer Cults and Culture* (London, New York: I. B. Tauris, 2007), 112-113, 116, 120, 123; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、107頁
- (35) 山本弘「アダムスキーは金星人の空飛ぶ円盤に乗った!？」『トンデモ超常現象99の真相』と学会（宝島社文庫、2000）所収、60-64頁。
- (36) Douglas Curran, *In Advance of the Landing: Folk Concepts of Outer Space – Updated and Expanded Edition* (New York, London: Abbeville Press Publishers, 2001), 44; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、181-182頁；木原『UFOとポストモダン』、39頁。
- (37) Reece, *UFO Religion*, 104-107, 110-112. なお、神智学協会は、1875年にヘレナ・ブラヴァツキー（Eelena Blavatsky）らによってニューヨークに設立されている。Robert Ellwood, *Theosophy: A modern Expression of the Wisdom of the Ages* (Wheaton, Illinois: Theosophical Publishing House, 1986), 7.
- (38) ジョージ・アダムスキー「空飛ぶ円盤は着陸した」『アダムスキー全集1：宇宙からの訪問者』久保田八郎訳（文久書林、1983年）所収、56-79頁。
- (39) 同上、56-62頁。
- (40) 同上、64-71頁。
- (41) 同上、71頁。
- (42) 同上、71-79頁。
- (43) ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、204-205頁；Reece, *UFO Religion*, 130-131.
- (44) Truman Bethurum, *Aboard a Flying Saucer* (Los Angeles: DeVorss and Co., 1954), 40; Reece, *UFO Religion*, 117. 以上は拙訳。
- (45) ハワード・メンジャー「外宇宙からあなたへ」『[2012年に再び戻ってくる] 天使的宇宙人とのコンタクト』益子祐司訳（徳間書店、2007年）所収、20-21頁
- (46) メンジャー「外宇宙からあなたへ」、91頁。
- (47) 同上、85頁。
- (48) アダムスキー「空飛ぶ円盤は着陸した」、79頁。

- (49) Jacobs, *The UFO Controversy in America*, 115; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、205頁。
- (50) アダムスキー「空飛ぶ円盤は着陸した」、79頁。
- (51) Daniel Fry, *The White Sands Incident* (Madison, Wisconsin: Horus House Press, Inc., 1992), 82-83; Reece, *UFO Religion*, 125.
- (52) ジョージ・アダムスキー「宇宙船の内部」『アダムスキー全集 宇宙からの訪問者』久保田八郎訳（文久書林、1983年）所収、140-148頁。  
 スペース・ブラザーたちが高度な科学・技術を有しているとされたことは、既に従来の研究者たちによって直接的、あるいは間接的に指摘されている。Jacobs, *The UFO Controversy in America*, 115; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、207頁; 木原『UFOとポストモダン』、35-41頁。
- (53) アダムスキー「宇宙船の内部」、140頁。
- (54) 同上、141頁。
- (55) 同上、145、148頁。
- (56) 同上、145-146頁。
- (57) リチャード・ローズ『原爆から水爆へ 東西冷戦の知られざる内幕（下）』小沢千重子・神沼二真訳、（紀伊国屋書店、2001年）、777-780頁。
- (58) Barbara Barksdale Clowse, *Brainpower for the Cold War : The Sputnik Crisis and National Defense Education Act of 1958* (Westport, Connecticut and London, England: Greenwood Press, 1981), 17.
- (59) Daniel Wojcik, *The End of the World as We Know It* (New York and London: New York University Press, 1997), 109-111; Charles E. Gannon, "Silo Psychosis: Diagnosing America's Nuclear Anxieties Through Narrative Imagery," *Imaging Apocalypse – Studies in Cultural Crisis*, David Seed, ed. (New York: St. Martin's Press, Inc., 2000), 111.  
 なお、“*On the Beach*” は、同名の小説をもとにした映画作品である。邦題は、『渚にて』であり、第三次世界大戦の核の惨禍を生き延びた人々の姿を描いたSF作品である。ネビル・シュート『渚にて：人類最後の日』井上勇訳（東京創元社、2007年）。
- (60) Wojcik, *The End of the World as We Know It*, 110.
- (61) スタンリー・キューブリック『博士の異常な愛情：または私は如何にして心配するのを止めて水爆を・愛する・ようになったか』（ソニー・ピクチャーズエンターテインメント、2004年）。
- (62) 1980年代の宇宙人たちが警告した内容と空飛ぶ円盤に用いられた科学・技術は、1950年代スペース・ブラザーのそれとは異なっている。にもかかわらず1980年代の宇宙人たちも心身ともに美しい人々とされたことは、これが時代を超えた価値であるからだろう。詳しくは、青砥「宇宙人像の変遷に見るアメリカの理想像：1950年代から1980年代にかけてのアメリカ文化」、第三章、第四章を参照。

- (63) *Life*, 7<sup>th</sup> April 1952, 1, 48-49, 98. それらをスキャンしたものが、図版2-5である。
- (64) *Life*, 7<sup>th</sup> April 1952, 8. 図版6. に掲載。なおレイセオン社は、現在ではアメリカ大手の軍需製品メーカーである。ミサイル技術においては先導的な役割を果たしており、アメリカ軍向けにパトリオットミサイルを開発した。また、1947年には、世界初の電子レンジを発明したことでも知られている。しかしこの電子レンジは冷蔵庫ほどの大きさがあり、また2,000から3,000ドルと高価なものだった。アメリカに、現在のような形での家庭用電子レンジが普及し始めたのは、1960年代後半以降のことである。
- <http://www.raytheon.com/about/history/leadership/index.html>
- <http://www.raytheon.com/about/history/early/index.html>
- (65) 島田真杉「第二次世界大戦後のアメリカ」『アメリカ合衆国の歴史』野村達朗編著（ミネルヴァ書房、1998年）所収、232-234頁。
- (66) 的川泰宣『ロシアの宇宙開発の歴史：栄光と変貌』（東洋書店、2002年）、18-19、21-22頁。
- (67) なお、有人惑星間飛行は2008年11月現在においても成し遂げられていない。
- (68) 木原『UFOとポストモダン』、33頁。
- (69) 同上；Jacobs, “UFOs and the Search for Scientific Legitimacy,” 219; Reece, *UFO Religion*, 130. なお本稿では、「ナットとボルト」をこれまでの研究に倣って、「物理的、機械的、工学的」の意で扱う。
- (70) 科学・技術こそが素晴らしい未来をもたらすものであるという「近代のプロジェクト」が崩れ去って久しい1980年代においては、ニュー・サイエンスという「新しい科学」が想定された。ニュー・サイエンスとは主に、ニューエイジ・ムーヴメントに参加していた者から歓迎された科学であり、これまでの近代科学が否定してきた霊的、形而上学的な側面を考慮に入れた新しい科学だとされた。ニュー・サイエンスについては、Wouter J. Hanegraaff, *New Age Religion and Western Culture: Esotericism in the Mirror of Secular Thought*, (Leiden; New York; Köln; E. J. Brill, 1996), 62-64, 67-68; 島薮『精神世界のゆくえ』、38頁を参照。
- なお注目すべきことに、1980年代の宇宙人たちが空飛ぶ円盤に用いた科学・技術は、ナットとボルト的な科学・技術ではなく、ニュー・サイエンスだった。これについては、青砥、「宇宙人像の変遷に見るアメリカの理想像：1950年代から1980年代にかけてのアメリカ文化」、第三章、第四章を参照。
- (71) 1950年代のスペース・ブラザーたちが科学・技術の粋ともいえる核の危険を訴えながらも同時に、極めて科学・技術に優れた存在とされたのは、「近代のプロジェクト」を継続しようとする態度が1970年代初頭までは続いていたという、木原の議論を補足するものでもあろう。木原『UFOとポストモダン』、34頁。
- (72) ピープルズは、スペース・ブラザーの神話は、伝統的な宗教が意味を失ってしまっていた時代における、新たな救世主神話をベースとした新宗教として捉えることが出来

ると結論付けている。ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、205頁。

- (73) Reece, *UFO Religion*, 200. また、この点において、コンタクティーと、いわゆる「UFOカルト」は一線を画している。
- (74) アダムスキー「宇宙船の内部」、182、318頁; Jacobs, *The UFO Controversy in America*, 116; ピーブルズ『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、205-206頁。
- (75) 木原は、本研究と同じく「スペース・ブラザーはアメリカの理想、あるいは未来像」という結論に至っているが、先に述べたようにコンタクティーたちが出版した書籍などの一次資料を用いて具体的に検証、分析を行わなかった。木原『UFOとポストモダン』、41頁。木原による研究と本研究との最も大きな差異は、本研究がスペース・ブラザーの誕生理由の一因として1950年代アメリカにおける科学・技術への期待感があったという点を挙げ、それを具体的に検証し、提示したことにある。

なお、木原は人類の「あるべき姿」を規定する存在を、「大文字の他者」という概念を使って説明している。木原はスラヴォイ・ジジエクを引用しながら、大文字の他者を「近代科学」のことだとしている。木原によれば、科学は、神なき近代において我々の「あるべき姿」を仮構していたが、二度の大戦によって「大文字の他者」としての内実を奪われ、大戦後に残ったのは空飛ぶ円盤と宇宙人という姿だったという。こうして未来の人間（あるべき姿）として措定された宇宙人と、そこから振り返る形で見た現在の人間（あるべき姿になっていない現在の姿）という図式が出来上がったという。同上、42-44頁; スラヴォイ・ジジエク、『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳（河出書房新社、2000年）、57-58頁。なお、大文字の他者（l'Autre）という概念は、元来はジャック・ラカンによるものである。ジャック・ラカン『精神病（上）』小出浩之、鈴木国文、川津芳照、笠原嘉訳（岩波書店、1999年）、60頁。

- (76) Josiah Strong, *Our Country: Its Possible Future and Its Present Crisis* (New York: The American Home Missionary Society, 1885), 175; 森本あんり『アメリカ・キリスト教史：理念によって立てられた国の軌跡』（新教出版社、2006年）、126、128頁。
- (77) 以降の議論について詳しくは、青砥「宇宙人像の変遷に見るアメリカの理想像：1950年代から1980年代にかけてのアメリカ文化」、第三章、第四章を参照。
- (78) レイチェル・カーソン『沈黙の春』青樹梁一訳（新潮社、1990年）、24頁。
- (79) 同上、243頁。なお、木原は『沈黙の春』を、環境汚染や自然破壊に警告を発した先駆者として位置づけているが、筆者とはその後に展開される論旨が異なっている。木原は、論の前提として、空飛ぶ円盤神話を前期と後期の二つに分けている。木原によれば、前期の空飛ぶ円盤神話において、科学と科学的合理性は超越的な場所に位置づけられていた。しかし、後期の空飛ぶ円盤神話において、それらは環境汚染を生み出すと同時に、汚染そのものを隠蔽するものでもある。木原によれば、科学と科学的合理性は最終的に、政府による陰謀の道具となったのだという。しかし筆者にとって、『沈黙の春』は、アメリカが抱えていた様々な問題の一つである環境問題に、一般の目

を向けさせた著作としての域を出るものではない。木原の議論についての詳細は、木原『UFOとポストモダン』、91-92頁を参照。

## 参考文献一覧

### < 書籍 >

- Bethurum, Truman. *Aboard a Flying Saucer*. Los Angeles: DeVorss and Co., 1954.
- Fry, Daniel. *The White Sands Incident*. Madison, Wisconsin: Horus House Press, Inc., 1992.
- Chryssides, George D.. "Scientific Creationism: A Study of the Raëlian Church." *UFO Religions*. Christopher Partridge ed., London and New York: Routledge Taylor & Francis Group, 2003.
- Clowse, Barbara Barksdale. *Brainpower for the Cold War – The Sputnik Crisis and National Defense Education Act of 1958*. Westport, Connecticut and London, England: Greenwood Press, 1981.
- Couch, Tom. *Wings*. New York: W. W. Norton & Company, 2003.
- Curran, Douglas. *In Advance of the Landing: Folk Concepts of Outer Space – Updated and Expanded Edition*. New York and London: Abbeville Press Publishers, 2001.
- Ellwood, Robert. *Theosophy: A modern Expression of the Wisdom of the Ages*. Wheaton, Illinois: Theosophical Publishing House, 1986.
- Flammonde, Paris. *The Age of Flying Saucers – Notes on a Projected History of Unidentified Flying Objects*. New York: Hawthorn Books, Inc., 1971.
- Gannon, Charles E. "Silo Psychosis: Diagnosing America's Nuclear Anxieties Through Narrative Imagery." *Imaging Apocalypse – Studies in Cultural Crisis*. David Seed, ed. New York: St. Martin's Press, Inc., 2000.
- Hanegraaff, Wouter J. *New Age Religion and Western Culture – Esotericism in the Mirror of Secular Thought*. Leiden, New York, Köln: E. J. Brill, 1996.
- Jacobs, David Michael. *The UFO Controversy in America*. Bloomington & London: Indiana University Press, 1975.
- . "UFOs and the Search for Scientific Legitimacy." *The Occult in America: New Historical Perspectives*. Howard Kerr, et al., ed. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1983.
- Peebles, Curtis. *Watch the Skies!: A Chronicle of the Flying Saucer Myth*. New York: The Berkley Publishing Group, 1995.
- Reece, Gregory L. *UFO Religion – Inside Flying Saucer Cults and Culture*. London, New York: I. B. Tauris, 2007.
- Strong, Josiah. *Our Country: Its Possible Future and Its Present Crisis*. New York: The American

- Home Missionary Society, 1885
- Wojcik, Daniel. *The End of the World as We Know It*. New York and London: New York University Press, 1997.
- アシユリー、マイク『SF雑誌の歴史：パルプマガジンの饗宴』、牧眞司訳、東京創元社、2004年。
- アダムスキー、ジョージ「空飛ぶ円盤は着陸した」(『アダムスキー全集1：宇宙からの訪問者』所収)、久保田八郎訳、文久書林、1983年。
- 同「宇宙船の内部」(『アダムスキー全集1：宇宙からの訪問者』所収)、久保田八郎訳、文久書林、1983年。
- アンカ、ダリル『BASHAR：宇宙存在バシヤールからのメッセージ』、喜多見龍一訳、VOICE、1987年。
- 同『バシヤール(2)：宇宙存在バシヤールが語る進化への道』、喜多見龍一訳、VOICE、1989年。
- 同『バシヤール(3)：宇宙存在バシヤールが語る新しい現実』、喜多見龍一訳、VOICE、1990年。
- ウェルズ、H・G『火星人襲来』、白木茂訳、集英社、1973年。
- ヴォルテール「ミクロメガス」(『浮世のすがた』所収)、池田薫訳、岩波書店、1953年。
- カーソン、レイチェル『沈黙の春』、青樹梁一訳、新潮社、1990年。
- 金子隆一『ファースト・コンタクト』、文藝春秋、1998年。
- 木原善彦『UFOとポストモダン』、平凡社新書、2006年。
- ジジェク、スラヴォイ『イデオロギーの崇高な対象』、鈴木晶訳、河出書房新社、2000年。
- 島蘭進『精神世界のゆくえ：現代世界と新霊性運動』、東京堂出版、1999年。
- 島田真杉『第二次世界大戦後のアメリカ』(野村達朗編『アメリカ合衆国の歴史』所収)、ミネルヴァ書房、1998年。
- シュート、ネビル『渚にて：人類最後の日』、井上勇訳、東京創元社、2007年。
- シュトラウス、デイヴィッド『パーシヴァル・ローエル：ボストン・ブラーミンの文化と科学』、井上正男監修、大西直樹訳、彩流社、2007年。
- セーガン、カール『人はなぜエセ科学に騙されるのか(上巻)』、青木薫訳、新潮文庫、1997年。
- ハーバーマス、ユルゲン『近代－未完のプロジェクト』、三島憲一編訳、岩波現代文庫、2000年。
- ピーブルズ、カーティス『人類はなぜUFOと遭遇するのか』、皆神龍太郎訳、文藝春秋、2002年。
- フェスティンガー、レオン『予言がはずれるとき：この世の破滅を予知した現代のある集団を解明する』、水野博介訳、勁草書房、1995年。
- ブルックスミス、ピーター『政府ファイルUFO全事件：機密文書が明かす「空飛ぶ円盤」50年史』、大倉順二訳、並木書房、1998年。

マクレーン、シャーリー『オール・イン・ザ・プレイング』、山川紘矢、山川亜希子訳、地湧社、1988年。

同『アウト・オン・ア・リム』、山川紘矢、山川亜希子訳、角川文庫、1999年。

同『ダンシング・イン・ザ・ライト』、山川紘矢、山川亜希子訳、角川文庫、1999年。

的川泰宣『ロシアの宇宙開発の歴史：栄光と変貌』、ユーラシア・ブックレット、東洋書店、2002年。

メンジャー、ハワード「外宇宙からあなたへ」(『[2012年に再び戻ってくる] 天使的宇宙人とのコンタクト』所収)、益子祐司訳、徳間書店、2007年。

森本あんり『アメリカ・キリスト教史：理念によって立て国の軌跡』、新教出版社、2006年。

山本弘「アダムスキーは金星人の空飛ぶ円盤に乗った!？」(『トンデモ超常現象99の真相』所収)、と学会、宝島社文庫、2000年。

ラカン、ジャック『精神病（上）』、小出浩之、鈴木国文、川津芳照、笠原嘉訳、岩波書店、1999年。

ローズ、リチャード『原爆から水爆へ：東西冷戦の知られざる内幕（下）』、小沢千重子、神沼二真訳、紀伊国屋書店、2001年。

### < 新聞、雑誌 >

The Gallup Organization. *The Gallup Poll* #401.

———. *The Gallup Poll* #455.

———. *The Gallup Poll* #455tps.

———. *The Gallup Poll* #499.

*Life*. 7<sup>th</sup> April, 1952.

*New York Times*. 6<sup>th</sup> July, 1947.

———. 7<sup>th</sup> July, 1947.

### < 映像作品 >

キューブリック、スタンリー『博士の異常な愛情：または私は如何にして心配するのを止めて水爆を・愛する・ようになったか』、ソニー・ピクチャーズエンターテインメント、2004年。

### < ウェブページ >

<http://www.raytheon.com/about/history/early/index.html> (January 20, 2009 accessed)

<http://www.raytheon.com/about/history/leadership/index.html> (January 20, 2009 accessed)

<http://www.galluppoll.com> (January 20, 2009 accessed)

## The American Ideal Image in the Age of Science and Tecnology

AOTO, Yoshitaka

This study focuses on the image of the space brothers which was peculiar to the 1950s America. The purpose is to figure out the reason why the myth of the space brothers was born and embraced in American society and culture in that decade.

The space brothers were the Extraterrestrials which were thought to visit earth by flying saucers. The contactees played a great role in forming the image of the space brothers. The contactees were the people who claimed that they met the space brothers and were taught a lot of things.

The contactees asserted that the space brothers enjoyed eternal peace, free from fear of nuclear weapons or war. They lived in a rich and Utopian society which was made possible by very advanced scientific technology. Decease, politics, or poverty did not exist among them. Their life expectancy was much longer than humankind. Additionally, the contactees claimed that they boarded the flying saucers which the space brothers navigated.

The creation of the image of the space brothers was reliant on the idea that Extraterrestrials were superior to mankind. Chapter II (*The Cultural Basis*) illustrates that this idea had already spread across the United States by the early 1950s. Many statistics support the prevalence of the idea of the existence of Extraterrestrials in that period. In particular, detailed records of the flying saucer's maneuverability and speed that exceeded those of human aircraft confirmed the superiority of the Extraterrestrials. The Extraterrestrial Myth was the basis for the image of the space brothers.

Chapter III (*Space Brothers*) analyzes four aspects of the space brothers with primary sources: the publications about the space brothers authored by the contactees. Firstly, the space brothers were beautiful people. Secondly, their attitude toward the contactees was of deep benevolence and understanding. Thirdly, they accomplished peaceful society without nuclear weapons. Finally, they enjoyed the achievement of their highly advanced science and technology.

Chapter IV (*The 1950s America*) examines those four characteristics of the space brothers, referring the historical background of the 1950s. There were two major reasons which made the space brothers embraced in the 1950s America. Firstly, the 1950s America suffered from the possibilities of nuclear apocalypse which the space brothers were free from. Secondly, the 1950s America yearned for the achievement of the science and technology that the space brothers enjoyed. In short, the space brothers attempted what the 1950s America longed for. Those two reasons were distinctive sentiments to the 1950s America. That's why the myth of the space brothers was born and embraced in that period.

The space brothers exhibited their superior scientific technology inside the flying saucers, because technology was considered as the key to the bright, clean, and rich future as depicted in the 1950s. Flying saucer was the symbol of the extraordinary extraterrestrial technology. By defining the interior of the flying saucer, the superiority of their technology was articulated even clearly.

The 1950s in America was all about science. Although the space brother possessed great technology, they avoided the extinction caused by the nuclear power, the ultimate product of scientific technology. Thus the extraterrestrials, who survived the paradoxical nature of science and technology, came to be a somewhat religious figure during the period.